

異文化理解は面白い

「専門は英語学なのですが、縁あって、2004年に1年近くアラスカ州・フェアバンクス市で過ごす機会があり、大学に勤めてからは、毎年夏に、時間の許す限りフェアバンクスに出かけて行って、そのとき知り合ったエスキモー夫妻の所でエスキモー語を習っています。」こんな自己紹介を初めて会った人にすると、返ってくる言葉は、大抵「アザラシの肉って美味しいの?」や「野生動物の毛皮生活はどう?」というものである。中には「そりゃ、エスキモーだもの、生肉だよな」と自信満々(?)に会話に入ってくる人もいる。自己紹介後に繰り返されるこんな質問に、私は「アザラシってレバ刺しに近い感じで結構いけますよ」とか「トナカイ皮の靴って軽くて丈夫なんですよ」と答える。私の返答は事実なのだが、それ以上に興味深いことは、上の自己紹介で、私は、俗に言う原始的な生活を体験したとは一言も言っていないにもかかわらず、会話はいつも『エスキモー=氷の上でアザラシを突ついている』、そんな固く強い先入観で始まることにある。ポケモンがエスキモーの子どもたちに人気があるとか、デニースと一緒に食事したときの話を続けても、やはり、返ってくるのは「冬は電気がなくて大丈夫?」や「で、何を食べてたの?」などの言葉である。その強い先入観をなかなか融解できず、最近では先のような受け答えでお茶を濁すようになってしまった。

ところが一方で、現在のエスキモーの人たちに、ア

ザラシや毛皮の生活文化がないのかと問えば、その答えは、村に暮らしていようが、都市に暮らしていようが、あるということになる。ここには、日本の文化は侍、寿司、お寺なのかと外国人に聞かれたときと同じような難しさと面白さがある。様々な理由から、我々のライフ・スタイルは大きく変化する一方で、やはり、どこかに伝統的な考え方や生活も残されているし、大切にしたいという意識もはたらく。今回の連載では、ステレオタイプのエスキモーのイメージを崩しつつも、現在に残る彼らの素晴らしい考え方や生活を紹介していきたい。

ところで、最近日本で熊が人を襲ったというニュースをよく見聞きする。ニュース解説によると、一つの原因は日本の里山が荒れていることにあるという。山から餌を探しに降りてきた熊が、そのまま草木が生え放題になっている所を抜ける。すると、そこに突然人のいる世界が現れ、パニックを起こすのだという。この話を先のエスキモー夫妻にすると、旦那さんの方が、「野生動物と共存するには、いつも動物から人間が見えるようにして、動物を安心させておかないと。村では家の周りや獣道を掃いたり、こちらの様子を見えるようにしているよ」とおっしゃった。動物から人間が見えるように生活する。その発想に本当に驚かされた。自分には思いもよらなかった視点が他の人たちには当然のこととわかったときこそ、異文化が本当に面白いと感じられる瞬間である。

表紙写真
について

カンボジアの王宮

室井美稚子 Muroi Michiko (清泉女学院大学)



抜けるような青い空に、黄金に輝く王宮の屋根が美しい。ここはカンボジアの首都プノンベン。今も国王が居住する宮殿である。熱帯モンスーン気候のこの地では11月から5月が乾期で、空が晴れ渡る。新旧を問わず、この地の名だたる建物の屋根には龍がシャチホコのように飾られ、その独特の角度が情緒をかもしだしている。この造形は、どこか民族舞踊の優美に反り返った手の動きを連想させる。王宮内の650メートルもの柱廊の壁には東南アジア一帯に伝承されてきた物語が美しい彩

色で描かれている。ゆっくりと歩きながら、アジアの絵巻を楽しんでほしい。

外に出ると、大路が計画的に造られていて、かつて『東洋のパリ』『インドシナのオアシス』と呼ばれていたことが納得できる。バイクや自転車に客車をつけたトゥクトゥクの運転手たちが客を引いており、交渉が成立すれば、ゆったりと風を受けて景色を楽しみたい。今は国の再建に向けてあちこちで工事が行われている。バイクタクシーに、子どもを含めて5人も乗っているのを目にする

と、驚くと同時にそのエネルギーと工夫に感心してしまうかもしれない。

北部の世界遺産のアンコールワットは秀逸であるが、是非首都プノンベンにも訪れてほしい。ポル・ポト時代の負の遺産が多く、特にトゥール・スレン博物館に行かれることをお勧めしたい。フランス領時代の立派な学校の建物で、かくもおぞましいことに使われたのかと、目を覆いたくなるほどである。その歴史をカンボジアの人々はどのように乗り越えようとしているのか、考えさせられることも多い。